
IS(インフィニット・ストラトス) ~何というチート人生~

メフィスン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

インフィニット・ストラトス
IS ～何というチート人生～

【Nコード】

N2188Z

【作者名】

メフィスン

【あらすじ】

俺の名前は久遠 龍二。目を覚ますとそこは見知らぬ場所だったんだ。しかもいきなり神様が現れて……俺の人生どうなるの！？この小説はオリ主が一夏ラウ・アーズのキャラとイチャイチャする、そんな話です。あと、オリ主はチートです。それは断言できます。

始まりは突然（前書き）

あの………すいません！もう片方が全く書けていないのに新作始め
ちゃって………

けど、頑張って行きますので………よろしく願いします！

始まりは突然

「……………ここ、何処だ？」

目が覚めると全く知らない場所に居ました。いや、俺はこんなところに来た覚えは無い。そうこう考えていたら、

「おお、目が覚めたか」

「うおっ！？だ、誰だよ！」

目の前に変なじいさんが現れた。いや、何だよこれ！夢か、夢なんだよな！

「違うぞ、夢ではない……………僕はお主から神と崇められとる者じゃ」

「はあ？か、神が何で俺の目の前に居るんだ？……………ってか心読むな！」

「おお、すまんすまん。しかしな、急ぎの用があるんじゃ」

「俺も学校があるんだよ！早くしてくれ！」

そう、俺は高校生なんだ。だから早くしないと学校に遅れる！

「ああ、その話なんじゃが……………お主、行かんでいいぞ。というか、行けん」

「……………はい？」

突然何だよ！自称神が現れたかと思うと学校に行けないって……………どういふこと？

「すまん、儂らのミスでお主を死なせてしまったのじゃ」
「何！？つーか、お前らの責任かぁ！！」

いきなり死の宣告来ました。って何で死んだんだっけ？……………あぁ、
そついや通り魔に刺されたんだっけ……………

「すまんっと言ってるであろう。だから責任を取って転生させてやる。ただし、元の世界は無理じゃぞ？」

「……………転生？それって、小説の世界とかも行けるのか？」

「儂の手にかかれば何処でも行けるわい！」

いや、胸を張られても……………つか、それなら……………戦争とかは無し
だな。すぐ殺されちまうもんな。

「それなら問題無い！お詫びにお主の願いをいくつか聞いてやる」

「それマジか！？」

なんか話がいい方向に？まあいいか。

「それでは、戦争が起こっている世界でいいのか？」

「いやいやいや！そんな事無いですよ！」

「……………変わり身が早い。それじゃあ、何処がいいのじゃ？」

うーん……………仮面ライダー好きだったからなあ、そこでもいいけど……………
…ここはあえて、

「ISの世界でお願いします！」

「IS……………？はて、どんな世界じゃったか……………」

「えっと、インフィニット・ストラトス……………だったような」

「ああ、あれか。分かった……それでお主の願いは？」

ふっふっふっ、これで俺はハーレムの中に……

「とりあえず、男のまま転生がいいです」

「了解した。……っという事は、ISに乗る才能もいるな？」

「はい！お願いします！」

「いいんじゃない、俺の責任だから……後は何がいいかの？」

「えっと、素手でISと戦える身体能力は……いけますかね？」

「むむっ、何故そんな能力が……ああ、なるほどな……分かった」

俺の心を読んだが、俺も良く考えて無かったんだが……まあ、いいか。

「それで、後は何かあるかな？」

「ええっと……専用機が欲しいんですけど」

「任せい！俺の手にかかれば最強の専用機を用意してやる！」

ん……？急に張り切ったぞ、そういうの得意なのか？

「ああそうなんじゃよ 俺はそういうの作るの大好きなんじゃ それでどういのがいいのじゃ？」

また心読んでる……

「えっとですね……平成仮面ライダーに変形できるISがいいんですけど……」

「なぬ？……それは、何だ、あの……サブライダーもなのか？」

目を光らせてこっちを見ないで欲しい。

「えっと、出来たらそうして欲しいなあって……」

「任せい！それくらい無いとつまらん！それで、カブトとかなのじやが……どうすればいいんじゃない？」

「どうすれば、というと？」

「ベルトに装着されたまま、か……原作通り自律稼働させるのか……なのじやが」

「もちろん、後者で！えっと、よろしければ、キバとかもそれでいけるでしょうか？」

「むむっ、任せよ！……久しぶりに楽しめそうじや……（ボソッ）」

ん？今楽しめそうとかなんとか……

「おっと、話がずれたの……それじゃあ、お主が目覚めたら……

……そうだな、IS学園入学1週間前のあたりになっておる」

「あ、ありがとうございます」

「いいんじゃない、気にするな。……それとだな、お主は篠ノ之 束と生活しとるようになっておる」

「……………はい？」

「あのじやな、お主は篠ノ之 束と共に生活をしとるという事になつとる。そうすれば、専用機持つとる理由にもなるじやろ？」

ああ、なるほどなあ……………だけどあの人かあ……………

「まあ、気にするな。チート、というんじゃないか？そんな機体を持てるのじやからな」

「ま、まあそうですけど……………」

「よし、そうとなれば出発じや。ISは後から送るからの！」

そう神が言つと、俺の意識が遠ざかっていった。

始まりは突然（後書き）

感想、批判などございましたら、感想にお書きください。

オリジナル主人公 & a m p ; I S 設定

名前：久遠 龍二（くどう りゅうじ）

年齢：15歳

身長：169cm

体重：68kg

容姿：黒髪で肩まで伸ばしている。目は両方とも黒。だが、電王を使用している場合はそのフォームに合わせた色になる。

性格：周りをよく笑わせる陽気な性格。だが、試合などには真剣に取り組む。

備考：篠ノ乃 束とは共に暮らしていたため、仲が良い。また、IS学園に来るまでは、束の研究を手伝っていたため、ISの知識は大体頭の中に入っている。

ISの設定

IS名：オールドライバー

能力：平成の仮面ライダー全てに変形をすることができる。また、タツロットや、カブトゼクターなどは、龍二の意思で呼び出せる。キバットバット三世は常に龍二の側に飛んでおり、クラス全員が存在を知っている。また、戦闘にアドバイスをしてくれる、オペレーターも果たしている。

また、飛ぶ事は基本出来ない。

待機形態は、腕時計型のデイクイドライバー。

オリジナル主人公 & amp; i S 設定 (後書き)

..... 原作を知らないバカですが、頑張ります.....

東さん登場と黒歴史とIS学園入学

「……………ん……………うくん……………りゅーくん！」
「ん……………ここ、は……………？」

誰かが俺の名前を呼んでいる気がした、っていうか絶対呼んでいたのだが、ここがどこなのか分からん。

「りゅーくん やつと起きたんだね」

「……………東さん…？」

「そうだよ おはよう、りゅーくん！」

名前を呼んでいる方を向くと……………篠ノ乃東が立っていた。そして俺が起きたのに気づくと抱きついてきた。嬉しいんだけど……………息が、息が！

「おい東、龍二が苦しそうにしてるぞ？」

「え？って、あー！りゅーくん大丈夫かい！？」

「いち、おう…？」

誰かが注意してくれたみたいなんだが……………あの声どっかで聞いたよ
うな……………

あゝそんなことより空気うめ〜！

「りゅーくん、朝ご飯だからね 早く降りてこないと東さんが全部
食べちゃうぞ」

そう言って部屋から出ていく東……………さん。一応年下だしなあ、『さ
ん』付けはしないとね！

「おい龍二！聞こえてるか？」
「ん、ああ……………つてキバット!？」

声のした方を向くと、キバットバット三世が飛んでいた。いやいや、おかしいだろ!？つていうか……………

「ここつて何処なんだ？」

「神の説明聞いてなかったのか？さっきの奴、篠ノ乃束の家だ。つても、即席だけだな」

「つてか、お前は何なんだ？ISは後で届くつて……………」

そう、神は後で届くと言っていた。だけど、キバットがいりや変身出来るぞ!？

「ああ、その事だが……………」

「りゅーくん早くう〜！」

「……………後で聞く」

下から束さんが俺を呼んでいる。確かに腹減ったな……………

「まずは腹ごしらえ、つてか？」

「はは、わかつてんなら行こうぜ!」

キバットを連れて、部屋を出る。下に行くつて言っても……………どの階段だ？

適当に行きゃ分かるだろ……………これでいいや。

「おお、りゅーくん流石だねえ、束さんの居場所が分かるなんて〜」

「

「いや……………適当つすよ……………」

「だな、近くの階段を適当に選んでたもんな〜!」

「お前、ちょ!」

キバットがいらぬ事を言いやがった……

「ありや、そうなの？ 束さん残念だねえ……ま、いいや。早くご飯食べちゃおう」

「あ、はい！」

そんでテーブル見たんだが……え、何コレ？ テーブルに並んでたのは、和、洋、中三食がそれぞれ並んでいた。ってか朝からへビーすぎる……唐揚げとか、スパゲッティとか……

「早く食べてね！ 束さんこの後用事があるから」

「用事、ですか？」

「そうだよ。それもりゅーくんに関係してる、大切な用事だよ？ 言わなかったっけ？」

何だろう……俺に関する用事……？

聞いた方が早いよな……面倒くさいけど、聞くか……お、唐揚げ美味しい！

「あの、束さん？ 用事って何ですか？」

「えつとねえ、りゅーくんがIS使えるよーって、世界に教えるの！」

「……はい？」

束さんの言ったことに、キバットと俺が気の抜けた返事をする。え？ まだ誰も知らなかったの？……まあ、いいんじゃない？

「それで、どうやって教えるんですか？」

「もちろん、TVだよ」

「……えっと、もしかして……」

当たりたくない予想が頭に浮かんでしまった……

「うん、テレビ局全部ジャックして、会見をするんだ あ、もちろ
ん、キツくんもだよ」

「はあああああ!?!」

「あつはは……って俺も出るのかよ!?!」

予想的中……上がり症の俺にそれはきついんだが………つという
か、キバット出していいのか?つと聞いてみると、

「何とかなるよ」

何ともならねええええ!!

酷いなあ、犠牲が増えたぞ……

まあ、いいか。一人より、二人の方がいいしな……

~~~~~

今はIS学園の入学式だ。前では校長が何か言ってるが、興味ない。  
え?会見はどうなったって?……聞かないでくれ。思いだしたく  
も無い……あの悪夢だけは……

そんなこんなでIS学園に入る事となった俺だが…… 居たよ、あ  
いつが。

そう、もう一人男でISを起動出来る男、織斑一夏だ。  
って言うか、真横だからね!?!わからない方がおかしいよ!?!あつ

ちは気付いて無さそうだし……………ああ、キバツトは念のためカバンに入れてもらった。だって、喋られても困るし……………

『おい！お前、早く出せつての！』

『おいおい、プライベートチャネル個人秘匿通信で話すことか？つーか、今入学式…分かるか？』

『……………ま、まあ分かるけどよお！』

うるさいな、キバツトは。つーかダメだろ、確かに会見の時、俺と一緒に出てたけど……………ちなみにベルトだけ部分展開してるんだ。ディエンドだからデザインが……………まあ、大丈夫だろ。

おっと、そんな事を考えてると話が終わったようだ。教室に早く行きたい……………あ、行けるのか。

**東さん登場と黒歴史とIS学園入学（後書き）**

えっと……こっちの方が人気みたいなので、とりあえず更新。

**Kの暴走／話は全く進まない（前書き）**

タイトル通りです…………… O R Z

## Kの暴走／話は全く進まない

「はあ……」

皆さんの視線が…凄い！一夏はこれに耐えてたのか…俺、無理かも…けど、せつかく転生させてもらったんだし、頑張らねば！目の前の一夏も頑張ってる…って、前の席一夏かよ！

「皆さん入学おめでとう、私は副担任の山田麻耶です！」

…沈黙。いやー、視線が本当凄い！背中痛いよー…なんつって。先生困ってるし…いやけど、後ろからも視線凄いし…横からも…死ぬな。うん。

『また死ぬのか？』

『ちょ、キバット！…あ、そついや…かばんから出してやるつか？』

なんてふざけてみるか。今出したらそつちに集中するだろ。…頑張つて逃げるよ？先生が話をしているが、まあ寮がどうこうって話だろ…気にしない〜！

『いいのか！？ラッキー！』

『…はい？皆の注目がお前に来るぞ？』

『そんなこと気にするかよ〜 早くしろって！』

…アホだ、こいつ。まあ、仕方ないから出してやるか。ばれないよ  
うにこそ〜つと…

うおつと…自己紹介の時間か？一夏〜呼ばれてるぞ〜？そんなこと  
言わないけど。

「織斑君！織斑一夏君！」

「は、はい！」

あゝあゝ、慌ててるな。つと…キバットの発射準備完了！存分に暴れる！

『おいキバット！いまなら出てよし！』

『よっしゃあ！行くぜ！』

「げえ、関羽！？」

「誰が三国志の英雄だ、馬鹿者」

あ、やべっ！キバット行っちゃだめえ！

「はっはっ！外だ！久しぶりの外だ！」

「…はあ！？」

「何だ、こいつは？」

あゝ、千冬さんだめ！俺のキバットがあ！そう思うと後は早い。急いで俺はキバットを掴み、机の中に放り込む。少し痛いかもしれないけど、死ぬよりはましだ！

「おい久遠、今のはなんだ？」

「あゝ…俺のパートナー、みたいなのですよ…」

千冬さんの目つき怖すぎる…っつーか間違っつては無い…はずだ。パートナーだしなあ。

「そうか…以後気をつける」

「えっと…何にですか？」  
「周りを見る」

うーっす…うおっ！何そのきらきらした目！？まさかキバットのせい！？…やっちまった…

「なるべく、カバンに入れときます…」

「それでいい。次はお前の自己紹介だ、早くしろ」

あつれ〜？優しいな？…まあ、いいか。とりあえず自己紹介！関羽に叩かれたくないし、

「何か変なことを考えていないか？」

「い、いえ！何も！！」

「なら早く自己紹介をしろ！」

怒った！？理不尽すぎるだろ…まあいいや、キバットも出してっ…

「えっと…俺の名前は久遠龍二です。それでこいつが相棒の…」

「キバットバット三世だ！よろしくな！」

「…」「…」

ちよっ！何この沈黙！？まあいいや、座ろっ…

「ふん、まあいいだろう。この前のあれでお前を知らん奴のほうが少ないだろう」

千冬さ〜ん！？思い出したくないんですけど！？それとクラスの皆も納得した表情やめて！

そんなこと考えてると、チャイムが鳴った。はふう、やっと開放さ

ねる...

Kの暴走／話は全く進まない（後書き）

感想お待ちしてまーす……

## 一・夏・鈍・感

「なあ、お前確か……………久遠龍二だっけ？」

「ああ、そうだけ？織斑一夏。…東さんから話は聞いている……………」

そんなもって休み時間に入ってボーツとしたかったのだが……………一夏に話しかけられた。めんどくさいけど、ここで無視すると印象悪くなるしな……………周りからだけどね！別に一夏に好かれても困るし……………

「え！？お前って東さんと仲良いのか！？」

「えっと……………ああ、そうだけ？東さんに連れられて世界を飛び回ってたんだ……………」

「それは……………何とも言えないな……………」

おまつ、その哀れみを込めた目で見るなあああ！キバットは俺の肩に乗ってるしよう……………うつつ、酷すぎる……………あ、一応転生するときにはそんな記憶なかったんだが、キバットが教えてくれた。何で知ってるのか気になったが聞かなかった……………めんどいもん

「ええ！？龍二君ってあの篠ノ乃博士と知り合いなの！？」

ああ、声デケー……………こっちまで聞こえてるつつの他にも色々言ってるし……………あれ？そっぴや箒……………いましたねえ、一夏の後ろにねえ、こっちすっごく睨んでますよー？怖い怖い……………

「あの……………一夏って呼んでいいか？」

「おう、俺も龍二って呼ばせてもらっぜ？」

「了解。んで、後ろ振り返ってみな？一夏」

「ん？……………って箒！？」

「やっと気づいたか馬鹿者！」

「ああ、君が篠ノ乃箒さん？東さんから話は聞いてるよ？」

「何！？姉さんから……………」

いや、知ってるけどね！？一応初対面だし……………まーたー目ーつー  
きーがー恐いー！東さんの話題は止めよう。うん、俺の命がもたないや。

「ああ、俺の事は気にしないで？一夏に用があったんでしょ？篠ノ乃さん」

「え？あ、ああ……………話がある、ついてこい」

「え、いいけどよ……………チャイム鳴るぜ？」

あ、本当だ。俺のせいかな？……………そうだな、俺のせいだ。ってか、これってさあ……………原作崩壊したね、うん。

「次の休み時間にしたらどうですかい？篠ノ乃さん」

「え？あ、ああ……………そうしろ！一夏！」

「わ、分かったよ……………」

何かアドバイスをしてみる。あ、箒がこっち見たな……………一応笑っておこう……………ただの変態に見えるだろうけど！

「（な、何なのだあいつは！いきなり笑いかけてきて……………でも、助かったから一応礼を言つとかねばな。）久遠、ありがとう。私の事は箒と呼んでも良いぞ？」

あれ、意外と好感触！？ま、まあ、あちらから言ってきたんだし……………

「いや、いいよ。俺は箒さんの恋が実るよう応援してるだけだよ？」  
「な、ななななっ!!」  
「どうしたんだ箒？顔真っ赤じゃねえか？」

あ、一応小声でだよ？一夏なら気付かないだろうが、箒が気にするだろうし。その結果がこれだよ……箒は顔真っ赤にして棒立ちだし、一夏はいつも通りの鈍感ぶりを見せてくれた。

「箒……でいいのか、チャイムがなったぞ？早く座れよ？」

「わ、私は恋など……え!?あ……すまん、久遠……」

「俺のことも龍二でいい」

「そ、そうか。龍二……昼休み、話がある……それではな」

「え、あ……分かった」

……えつと？わたくし何か変なことしましたっけ？つかキバツト鞆に入れたって！

「嫌だね〜!」

「お前なあ……あの鬼に叩かれてもいいのか？」

「う、そ、それは……」

「だったら早く入れ！織斑先生が来るまでにな!」

「うい〜……」

ようやく入りやがった。疲れるねえ、わざわざこんな事しねえといけないのか……面倒だな。

……さて、と。授業が始まったんだが……あの、織斑君？何を頭抱えているのかな？

「織斑君？何かわからないところがありましたか？何でも質問してくださいね、私は先生ですから！」

おお、急に胸を張って！……む、胸が揺れている……！気にしてはいけないのは知っているのだが……

「あの、先生……」

「はい、何ですか」

まさか。

「ほとんど、いや……全部分かりませえん……」

やりやがった。おいおい、織斑君よお、そりやないだろう。って……俺は東さん手伝ってたからなあ……

「ええ？ぜ、全部ですか……今の所で分からないって人はいますか？」

……。

沈黙ってーのは嫌いだああ！あの入学前の必読の参考書東さんに見せたら、分かりやすく説明してくれたし……ナニコレ？役得じやないかよ。流石、神！このことも想定して！

「織斑、入学前の参考書は読んだか？」

「え、ええつと……電話帳と間違えて、捨てまし」

バシッ！

痛そうだな、ほっほっほ。この後、結局再発行して、一週間で覚えるようになったようだ。ま、俺には関係無い。

一・夏・鈍・感（後書き）

こっちの方が書きやすいのは何ででしょうか。感想お待ちしております！

## Sの罵倒／被害は俺だけ？

次の休み時間、一夏はさっさと筭に連れてかれちゃったから……暇だ。誰かと話したくても周りには人が居ない。遠巻きから俺を見てやがる……俺は珍獣か！？

「ちよつと、よろしくて？」

「ちよつとよろしくないです」

んあ？誰だっけ？……名前は……なんだっけ？セ……セ……そう  
だ！セシリア・モルモットだ！何でモルモットが俺に話しかける？  
…あ、一夏が居ないからか。

「まあ！何ですの！その態度は！私に話しかけられるだけでも、光荣なのでからそれ相応の態度というものがあるのではないですか？」

「だって…お前の事知らないしよ」

「なっ！私を知らない？セシリア・オルコットを！イギリスの代表候補生にして、入試主席のこの私を？」

「へえ…セシリア・オルコットって言うのか。さっきまでセシリア・モルモットだと思ってたよ」

「なっ！？それはあなたでしょう？なんてったって2人目の男子I S操縦者ですからね」

これって、キレテイイノカナ？モルモット実験生物って事だろうな。だけど、俺には東さん居たし…そっいうや、色々実験してたなあ…

「えっと…まあそうだな。東さんには色々協力してたし」

「それって、篠ノ乃博士のことですわね？」

「ああ、そうだが？んで、その代表候補生さんが、何のようだ？」  
「…本来なら私のような選ばれた人間とは、クラスを同じくすることだけでも奇跡・・・幸運なのよ？その現実をもう少し理解していただける？」

「へえ、そうなのか。ま、俺には関係ない…よな？」

また目つきが怖い。まあ、篝よりはマシだが…ん？千冬さん？あの人は神の域を超えてるだろ。  
いや、真面目に。

「関係ありますわ！なぜなら、あなたと私は同じクラスですもの！」

「え、ああ…そうだったの。まったく気付かなかった…」

「まあ！あなた、自己紹介をちゃんと聞いていなかったのですか！？」

「周りの視線のせいでそんな余裕なかった…」

これは、本当だ。周りが俺と一夏のことをずっと見るから、緊張しまくってたからな。あいつもそうだろう…まあ、これで3人覚えれたな。一夏に篝に…オルコットだな。後は絡むまでわかんねえ…のほほんさんもあだ名しか分からないからな。本名を聞かねばならん。

「そんな理由になりませんわ！大体、あなた方ISについて何も知らないくせに、よくこの学園に入れましたわね。男でISを操縦できると聞いていましたから、少しくらい知的さを感じさせるかと思っていましたけど、期待外れですわね」

あ、ちよつとイラってした。まあ、こんな小物に怒っても意味無しな、我慢。

「すまないな、よく言われるんだよ。俺って馬鹿だしな… ISに関しては別だろうけど」

「ISのことかわからないことがあれば、まあ泣いて頼まれたら教えてもよくなってよ。何せわたくし、入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですから」

え、無視ですか？あの、俺って束さんという凄い教師が居たんですけど。…まあ、いきなり抱きついてくるところ以外は完璧だしな、あの人。

「…え？ま、まあ機会があればな…あ、そついや俺って入試受けてないような…」

「…はい？」

「だから、入試受けてないんだよ。前日まで束さんと一緒だったし、そうなんだよ、俺の会見という名の黒歴史の後、日本政府から電話が来て急遽入学することになったんだ。だからそんなの受ける暇なかったんだぜ？それでも、神から専用機もらったのだからそのときだし。束さんが持ってたんだがな…そういうことにしたんだろ。たぶん。」

「まあ、関係ないだろう。どうせ負けたって。俺のことだし…」  
「そ、そうですね、あなたなんか勝てるわけありませんわ！」

うーん、勝てただろうけど、いちいち絡まれるのはメンドイ。つづーことで、負けたって事でいいや。

チャイムが鳴るまで、こいつは一夏を探してたな…俺の目の前で。邪魔すぎるだろ、淑女さんよ。さすがに女尊男卑のこの世でもそりゃあないんじゃないですかい？

Sの罵倒／被害は俺だけ？（後書き）

感想お待ちしています。

篠・ノ・之・第(前書き)

タイトルはおふざけです……(笑)

篠・ノ・之・幕

「あの、箒さん？用事って何かな？」

「そ、そのだな…何故、私が一夏の事が好きだと思っただの…？」  
「見たら分かるって…」

今は昼休み。さっき言われたとおり箒に連れられて屋上に来たんだが…腹減ったなあ、これだけのためにここまで連れてこられたの？俺…辛いよ？

「……………」

「話ってこれだけ？まあ、任せろ。応援はしてやる」

「へ！？あ、ああ…すまないな」

「いいて、束さんにも言われてるし…まあ、それは理由の一つで。大きな理由は、俺なんかより周りの皆が幸せになれるようになって言う俺のモットーがあるからだ！」

「…は、はは…」

「わ、笑われた！？」

やべ、声に出しちゃった…相手も目丸くしてるし…けどなあ…転生前からの目標だからな。これ変えられないしい…ま、いいか。

「い、いや…すまん。私のためにそこまでしてくれるとは…」

「いいての、よし、話が済んだなら飯食に行こうぜ！」

「え？あ、ああ…」

ど、どうしたかかね？顔赤くして…あ！手つないじゃってるからか…けど、こうしないと早くいけないし…腹減ったああああ…！全力で走る…！！

「全力で走っていくけどいい？答えは聞いてない！」  
「せめて聞いてくれええ!!？」

Side 篠ノ乃 箒

久遠 龍二、私の手を握って食堂に向かっていている男の名前だ。この男は自分の事より他人に幸せになってほしいと言った。正直、私には理解が出来なかった。

それは、自分がそういう事を考えず、ただ一夏の事を追いかけていたからだと思う。だが、こいつの一言で気づかされた。

……他人の事も、しっかり見て行かなければ行かねばならないと言っことだ。

つというより早すぎはしないか？え、まだ全力じゃない!?止めてくれえええ!!

Side 久遠 龍二

何か、箒が上の空になって何か考えている。まあ、いいのだが……

「おい、着いたぞ？」

「あ、ああ……」

「は？ど、どうした？……ってなるほどね……」

箒の視線を追っていくと……一夏が楽しそうに女子と食べているよ。あいつ、本当にダメだな……

「よし、箒。俺が何とかしてやる」

「べ、別に飯くらいは……………」  
「いっての、任せろって!」

そう言つと一夏達に近づいていく。もちろん、手はつないだままだぞ?

「おい、隣いいか?」

「え?ああ、龍二か。いいけどよ……………あ、篝もか?」

「あつたりまえだ、馬鹿。幼馴染み何だろ?話すことあるだろうが……………」

「ああ、そうだな……………すまないけど、どいてくれない?」

「ええ?折角織斑君の隣になれたのに?」

「すまん!お願い!」

「俺からも頼むよ、飯食う時間無くなってしまうからさあ……………」  
「……………」

篝さん?すねないの。いや……………けど、すねても可愛いな。取り合えず頭なでなで。

「なっ!?何をする!」

「あ、すまん……………可愛かったからつい……………」

「わ、私がかわいい……………!」

ああ、顔赤らめちゃつて。こら、その子!やつてほしそうな目で見るなあああ!絶対やらねえぞ!

「頭……………撫でてくれたら代わつてもいいよ?」

「りょーかい。ほらよ……………」

「あ、ありがとう!はい、どうぞ!」

「ほら、篝空いたぞ?俺はいいから座れって」

「私が……………可愛いか……………フッフ……………」

「おーい……………箒さん？」

「……………はっ！あ、ああ……………すまないな……………」

箒さん……………俺に言われて喜ぶんかい。

「ん？龍二、お前はどつするんだ？」

「そ、そうだぞ！お前はどつするんだ！」

「んー、後で席探すよ。箒、何食いたいんだ？俺が取ってくるよ。その間にお前はー夏と話しとけ」

「そこまでしてもらつと逆に困る！……………和風定食で……………」

「りょーかいつと……………」

ふんふん、色々メニューがあるんだな。うーん……………今日はおでんでいいか！天堂屋みたい具は3つだったらい……………わけないか。伊達さんが作ってたおでん旨そうだったなあ……………お、きたきた。

「ほれ、これだろ？」

「ん？ああ、すまん……………」

「龍二……………俺、もう飯食い終わったからここ座れよ？」

「いや、お前は箒と話せばいい。聞かれなくなければ俺はどっか行くぜ？箒さん？」

「……………私のそばにいる……………」

「りょーかいつと……………つてああ！？」

「……………ど、どうした（のだ）！？」

「キバット忘れた……………」

仕方ないんだ！箒が二人きりがいいって言われたし……………すぐにここに来たし……………後で何か食べさせよつと……………

「ああ、あいつか？」

「そ、まあ気にすんな。お前らには関係ない」

「そうだな……………」

「そうそう、んじゃ早く食うわ。それまでお前ら思い出話とかしときな？休み時間だけじゃ足りなかっただろ？」

……………これでよし。俺はゆっくり飯が食える……………ん、大根旨いな！二人も仲良さそうに話しているし……………良かった、良かった。これでいいんだ。俺は一生独り身だろうなあ、こんな感じじゃ。

「ふう……………」

「どうした龍二？何かあったのか？」

「篝……………ありがとうよ。けど、心配すんな、俺は大丈夫だ。お前は自分の事に集中しな？」

「あ、ああ……………助かる」

ん……………なんで俺の事を気にするんだろ。まあ、いいが……………

「あ、食い終わった…お前ら、教室戻るぞ？」

「え？ま、まだ私が食い終わってないぞ！」

「そうか……………んじゃ、俺は待つとくから、お前は先に帰っていいぞ、一夏」

「おう、分かった……………遅れるなよ？」

「はは、分かってるって！」

……………まあ、これで帰るあいつは駄目だろうな。篝さんがすつごく怒ってるし。

篠・ノ・之・幕(後書き)

感想お待ちしております。

**湧き出る殺意（前書き）**

タイトルは気にしないでください。

## 涌き出る殺意

「箒……………今のはすまなかった」

「……………別にいい。あいつはああいう奴だからな……………」

凄く怒ってらっしゃる……………確かに一夏が先に戻るのはいやな。俺が原因だけど……………さて、どうすれば一夏が箒を好きになるんだろつか……………

「龍二……………おい龍二！」

「ふえ？……………ああ、食い終わった？」

「そうだ！早く戻るぞ！」

おおっと、意外と時間経ってる…走って帰るか。箒が追い付けるかわからんが。

「箒、走るか……………？」

「ああ、当たり前だ！」

「うおっ！待ってっ！」

それより先に走っていきやがった。ん〜、足速いな。まあ、それはおいといて……………

「食べた後すぐに走っちゃいけません！」

~~~~~

「ああ、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな」

ギリギリ授業開始には間に合った…だけど、この授業で代表を決めるらしい。まあ、俺はめんどいし…一夏がなればいいんだよ…うん。

「クラス代表者とは、対抗戦だけではなく、生徒会の開く会議や委員会への出席…まあ、クラス長だと考えてもらっていい。自薦他薦は問わない。誰か居ないか？」

「はい、織斑君を推薦します！」

「私もそれがいいと思います！」

「俺もーそれがいいなあ〜」

「お、俺？…つて龍二！お前も俺を！」

「すまないが、お前が適任だからな…」

「他にはいないのか？いないなら無投票当選だぞ」

「じゃ、じゃあ、俺は龍二を推薦する！」

「なっ！？まあ良いけどよ…」

おうおう、俺を選ぶなんて…なんてことしてくれるんだ！これじゃ、睡眠時間が削られる可能性があるだろうがああああ！？…まあ、戦えるなら良いけどよ！

「納得いきませんわ！そのような選出は認められません！」

おお、モルモットが机叩いて立ち上がった。ついでに言うと、一夏も立ってる。…ん？俺？もちろん座ってるよ？授業中だからね！お前らそういうところはちゃんとしろよ？

「男がクラス代表なんていい恥さらしですわ！このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？」

ほほう、言うじゃないですか。お前なんかにはちょうど良いんじゃないや

ないか？一夏が代表になるなんてな。俺？やる気無いからどうせ負けるよ。だって…本気で勝ちに行こうとすると、ハイカブ使うもん！

「いいですか！？k」

「だーめ」

「なっ！？」

「おい、龍二…」

「いいんだよ、どうせお前も限界だったんだろ？」

「あ、ああ…」

そろそろ授業始めて欲しいという視線が…数人から来てたので早く締めてほしいのだが。まあ、俺は良いんだけどな？その…だな、先生が俺をガン見してくるんだよ。それから開放されたいんだ！何で俺は睨まれねえと何ねえんだああああ！！

「（面倒だから）オルコットさんがやればいいと思います。そもそも、彼女は学年主席だと自慢してたので、彼女が適任でしょう」

「久遠、面倒だと思っただろうな？」

「あ、当たり前ですよ！俺は早く授業したいの、分かる？オルコットやこ」

「決闘ですわ！」

「…あ？」

決闘って…勝ったら何もしないの？ねえ、聞いてる？

「勝った方が、クラス代表ですわ！」

「「ええー…？」」

「なっ！？受けるのですかどっちなのですか！？？」

おお、一夏君と気があったではないか。よし、握手しとこ。うんう

ん、友情っていいなあ。

「…しゃーない。それが手っ取り早いな」

「おう、いいぜ。俺も受けてやるよ。四の五の言うよりわかりやすい」

「言っておきますけど、わざと負けるようなことをしたらわたくしの小間使い…いえ、奴隷にしますわよ？」

ど、奴隷？…あれですか、頭に性が付くやつですか。

「…まあ、俺は勝ちたいんでな…とりあえず戦えりゃあいい…」

「真剣勝負で手を抜くほど腐っちゃいけない…ハントデはどれくらいつける？」

「あら、早速お願いかしら？あなたもハントデが欲しいなら今のうちですわよ？」

イラッ …いや、冗談抜きであのドヤ顔は許せん。今ここで力の差を見せ付けておくべきか…？

「いや、俺がどれくらいハントデを付けたらいいのかなーって」

「…え？」「…」

「当たり前だろ？お前らが驚いてんのは、ISが使える女と使えない男の力の差についてだろうが。俺らは少なくともお前らと同位置なの…分かるか？」

「…」「…」「…」

…なんで黙るかな？殺気とか出てたかな？…千冬さんは笑わないの！その笑い方は人を怖がらせる！

「ま、まあだな。俺たちだってIS使えるんだが…相手は代表候補

生だからな。一夏はどうだか知らんが唯一試験で教官倒したらしいしな…俺は殺ってないけど」

はあ、疲れた！もう当分喋りたくない！

「さて、話はまとまったな。それでは勝負は1週間後の月曜日。放課後、第3アリーナで行う。織斑とオルコット、それと久遠はそれぞれ準備しておくように。それでは授業を始める」

あつれ〜？俺がついでみたいな感じになってませんか？……………まあ、いい。今は授業に……………集……………ちゆ……………ZZZ……………

涌き出る殺意（後書き）

感想お待ちしております。

寮と地獄と束さんへの制裁

「……頭、痛い」

「それはお前が悪いではないか。あの人の前で堂々と寝るとは……」

ああ、そういつて頭撫でてくれるの嬉しいよ、篤さん？

……あのあと眠すぎて寝ようと思ったんだが……いやあ、鬼神ちいゆさんが恐ろしくて、何度も殴られたよ。しかも常に同じ場所を……放課後の今はもう大丈夫だがなあ。

「っていつか篤さん？部活はどうしたんだい？それと、撫でてくれるのは嬉しいんだけど、何で撫でてくれるのかな？」

「……」

「そ、そうだったな！ではな！」

くっそはええ……ん？一夏君？……俺の前の席で死んでますよ？頭から煙出してね。一気に頭に詰め込み過ぎたんだろ。そして周り！やりたそうにこっちを見るな！……俺の頭は俺が認めたやつしか撫でさせんからなあ！？

「ああ、織斑君、久遠君。まだ教室にいたんですね。よかったです」

「はい、何ですか？」

「……」

山田先生が教室に入ってきた。あれ……放課後、だよな？そして、一夏、せめて返事はしようか。

「えっとですね、寮の部屋が決まりました」

「はい？」

おお、やっと起きたか。いや、起きてたのかもな……………今となっ
ちやどうでもいいが。

「俺の部屋って決まって無いんじゃない？自宅通学だと聞いたんですけど……………」

「俺も」

「そんなんですけど、事情が事情があるので一時的な処置として部屋
割りを無理やり変更したらしいです」

事情？……………ああ、俺たちって男でIS使えるから、他国に捕らえ
られないようにここで保護という名の監視をするためか。

「なるほど……………で、俺は一夏と同じ部屋ですか？」

「そ、そうですね！女と同じ部屋とか安心して眠れませんよ？」

「そ、そのですね……………一人が相部屋で、もう一人が一人部屋何で
すよ……………」

ん？……………一人部屋がいいに決まってるではないか。はっはっは。

「俺が一人部屋ですよね？」

「ええつと……………織斑君が、一人部屋なんです」

「神は俺を見捨てたあああ！！」

「よし！」

何でだよ！？俺が一人部屋じゃないの！……………一夏と筈の相部屋じゃ
ないのか！？
な、なななな……………

「……………」

「く、久遠君？これが部屋の番号が書かれている紙と、部屋の鍵です」

「ま、俺もお前とが良かったんだが……………これは仕方ないな」

ドヤ顔すんな！一夏の野郎……………来週潰す！絶対に潰す！！

「…あ、そう言えば。一夏、お前荷物は？」

「そうそう。先生、荷物を家に取りに帰らないといけないんですけど……………千冬姉？そのカバンは？」

「織斑先生だ。私が手配してやった。久遠は持ってきているだろう？」

「え？ああ、そうですね」

今日、日本に帰って来たって……………酷いな。前日からホテルでゆったりさせてくれるかと思いきや、飛行機の中って……………嫌だわ。

「あ、ありがとうございます」

「まあ、生活必需品だけだがな。着替えと携帯電話の充電器があればいいだろう」

「で、では！時間を見て部屋に行ってくださいね」

このあと夕食は何時からだとか、部屋のシャワールームしか使つてはいけないとか……………色々注意を受け、今……………寮に向かっている。俺に言わせちゃこんなの……………地獄への道だろ。

「えっと……………あ、俺ここだわ。後で飯食いに行こうぜ、龍二」

「お前は気楽で良いよなあ……………一人部屋なんだし。俺は見知らぬ人と相部屋になる可能性あるんだぜ？……………まあ、夕食は一緒に食うけどな。じゃあ、後で」

はあ……………ここか。入りたくねえ……………とりあえずノックだな。

「ノックしてもしもし」

「……………」

よし、反応……………ええ！？ああ、飯食いに行ってるのか。そうだ、そうなんだ。そう言うことにしといてくれ……………！

「ん、意外と綺麗だな……………」

「誰かいるのか？」

はい、死亡フラグ来ましたな。俺、このフラグ壊せたら、怖いもの無くなると思うんだ……………

「ああ、同室になった者が。これから一年、よろしく頼むぞ」

「……………」

声を出したら殺される！ちょっとでも長く……………一秒でもいいから長く……………！

「こんな格好ですまないな。シャワーを使っけていな。私は篠ノ乃

……………」

「は、はろー？」

……………ここで何か言えた俺って凄いと思うんだ。俺が目にしたのはシャワーを使用していた筈さんだ。白いバスタオルに包まれた身体……………はい、堪能しました。もう満足です。

「り……………りゆう……………じ？」

「あ、ああ……………」

その慌てている表情もまた可愛いな……………ってそう言うことじゃなく！

「見るなっ！」

「言われなくてもそうする！」

ベッドに飛び込み、布団で身体を覆う。これで大丈夫だろ。

「な、なぜ、お前が、ここに……………？」

「えつとですね……………その前に着替えましょうか？ちゃんと話をしたいんだが」

「わ、分かった！ぜ、絶対に……………み、見るんじゃないぞ！」

……………あれはフリか？見てくれってフリなのか？そうだとしても、わざわざ死に行くなんてバカなことはいしな。……………このまま待機だな。

「い、いいぞ……………」

「分かった……………」

うんうん、剣道着も美しい……………

「そ、それでだ！何故、お前がここに……………」

「俺も……………この部屋何ですよ……………」

「な、なに！？」

「ええ、昨日まではね？俺もアパート借りてそこから通学するって計画だったのよ。けどな、今日になって急にですね……………決まったんですよ」

「そ、そうなのか……………」

う、うん！俺は正しい！俺の計画はこういう物だった！東さんは残念がってたが……………ん？

「ど、どうしたのだ？」

「いや、心当たりが……………」

「それは誰なのだ？」

「お前の姉さん……………」

多分だが、そうだろう。あの人はそれをやりそうだからな……………I
Sの設計図とか渡して。

「……………それは、」

「……………ちよつと待ってな。今電話する」

「わ、分かった……………」

東さん……………今度会ったら一発殴らねばな。

「……………もしもし？」

『やつほ〜 みんなのアイドル東さんだよ……………って切らないで

え！』

「はあ……………まだ言ってるんですか、それ」

『あはは、そうなんだよ？りゅーくん』

……………はあ、この人と話すと疲れる。

「東さん、話があるんだけど……………」

『ん？何かな〜？この天才の東さんに何でも言ってるらん』

「……………俺を相部屋にしたのって、東さん？」

『……………あ、あはは〜 な、なんのことかな？べ、別に篝ちゃんと同じ部屋になんて……………』

「誰が筭と一緒にって言いましたかね？」

はあ、やっぱりか。

『ぎくぎくうー！……ごめんね、りゅうくん。筭ちゃんを任せられるの、りゅうくんしかいないから……』

「……一夏じゃ、駄目なんですか？」

『いやあ、いつくんはまだ専用機持ってないからー 君しかいないんだよ』

……さいですか。もういいや……どうにでもなれ……

「それだけですんで。じゃ」

『あ、うん 何時でも電話してきてね』

——ブツッ。

「……だとさ」

「……ウチの姉がすまん」

束さん……絶対殴る！

「いや、俺こそ……俺なんかで良かったか？」

「……まあ、一夏の方が良かったが……」

それ目の前で言われるとちょっとキツいな！まあ、俺には……恋
人なんか……

寮と地獄と束さんへの制裁（後書き）

相変わらず、短いですが……

感想お待ちしております。

「夏の脳みそブレイカー（前書き）」

……タイトルとの違いが……！

一夏の脳みそブレイカー

「だるい、眠い、腹減った！」

「おいおい、まだ朝だぜ？」

「自業自得だ」

朝だよ……………眠くて辛い。いや、異性と同じ部屋で寝るとか、俺が耐えられんわ。……………あ、キバツト……………ま、いいや。どうせ水とか勝手に飲んでるだろ。

「はふう……………しゃーねーやー、もう叩かれてもいつかー」

「諦めるのかよ……………」

「私は知らんぞ？」

それよりもだな、篝さん……………君は何で普通に寝れてるのかな！？

「そついや龍二、お前って専用機持つてるのか？」

「……………いや、持ってないぞ？」

「何？……………ああ、そうだったな……………」

何で俺が持つてないように見せかけているかと言つと……………相手に情報を渡したくないからだ。篝もそれには賛成してくれた……………つてのが1つで、もうひとつは……………このままもう一機専用機貰えるんじゃないかね？って思ったから。束さんと篝と……………本当に少ししか知らないからな。束さんが千冬さんに言つてなかったら話だが。

「というか、早く飯食おうぜ。回りの視線が……………」

「そ、そうだな……………俺たち、すごい見られてるよな……………」

「……………私には妬みの視線が多いのだが」

この学園にいる男生徒両方と親しくしてるんだからな。そりゃ、嫉妬するわ。

「ふう……………なあ一夏、ISの勉強しないか？俺と二人で」

「それはありがたいな！……………ところで、どこでするんだ？」

「俺の部屋。すなわち、幕にも後から参加してもらう、だよな？」

「ああ、私が希望したのだ……………その、だな、お前に勝ってほしいからな！」

そこは素直に一緒にいたいって言えばいいのに……………幕のそういうところが好きなんだが……………

「え、遠慮する！」

「……………お前なあ、どうせわからないとか言うんだろ？」

「な、何で分かったんだ！？」

「そんな事だろうと思った……………」

「馬に蹴られて死ね！」

一夏、お前キバットにライフエナジー吸わすぞ？

「んじゃ……………放課後、俺の部屋な。」

「分かった。んじゃ、教室行くか」

「俺は後で行くから、お前ら二人で行きな？」

「おう、じゃあ行こうぜ、幕！」

「あ、ああ！……………す、すまん……………」

仲良さそうなのになあ、こう見ると。だけど、一夏が鈍感だから……………なあ。

~~~~~

「——それでだな、ここはこうなって……」

「ああ、なるほどー!」

「ふむ、そういうことなのか……」

放課後、俺たちは俺と篝の部屋で勉強会を開いていた。……だが、途中参加の篝も知らない事があるらしく、講師は俺だけだ。……  
…めんどくさ。あの人呼ぼう。

「ちよつと待つてる、特別講師を呼ぶわ」

「誰なんだ?それ……ってテレビ?」

「違う、これはテレビ型の通信機だ……おい……龍二、まさか……」

「そのまさか……東さーん、見えてる聞こえてるー?」

「おー、りゅーくん おっけーだよー。あ、篝ちゃんといっくんも!何してるんだい?」

……東さんだ。開発者に聞くのが早いだろ、ってわけであとは頼んだ、東さん!

『まっかせなさい!この天才東さんがわかりやすく説明してあげるよー!』

「……相変わらずだな、東さんは」

「……姉さん……」

さてと、あいつらが教えてもらっている間に、メダルでも拭くか。一夏とモルモットをフルボッコするのはオーズじゃないよ?だけどね、綺麗じゃん だからいつも綺麗にしてるんだ。

「お前らしっかり教えてもらえよ?この人ならなんでも答えられる。

絶対にな」

『任せてー』

「あ、ああ……………龍二？それなんだ？」

「ん？来週あいつを潰すために使うIS関係の道具」

そつだよ……………結局もう一機貰えなかったよ！…！ということでも、手加減しないでいいならプロティラ無双でいいや……………っつと言うわけで、プテラのメダルを拭いています。おぉっ、きれいきれい！

「夏の脳みそブレイカー」(後書き)

感想お待ちしています。

## 龍二の暴走は止まらない

「…金髪殺す…」

「…オルコット、俺は知らないからな」

「二人まとめてかかってきなさい！」

クラス代表を決めるための試合が始まるうとしてるんだが…何でこうなった。…さっき何があったんだ…

くくく

「…で、結局なんだったんだ？」

「何が？」

「あの勉強だ！IS使って練習してないじゃないか！」

ピットの中でクラス代表戦が始まるのを待っていたのだが…一夏君が不満を漏らしてきてる。だってなあ、お前の専用機がまだ来っていないからな、練習しようがないんだよ。

「仕方ないだろう、お前のISが来ていないのだからな」

「現在進行形だねー、東さんは何してるのかなー？」

「…練習機あつただろうがあああ！！」

一夏君が怒りました。まあ、すぐ箒さんに殴られるというわけなんだが…まあ、俺は止めるよ？箒が嫌われちゃうからね？

「な、何をする！」

「箒、お前って好かれたいか嫌われたいのか良くわからないことするよな？ここは我慢しろ…嫌われるぞ？」

「うっ…仕方ないな…」

「誰に嫌われるんだ？つて痛っ！！」

…鈍感すぎるだろう。こいつは俺が殴る…全力でな。篝さんがそれをしたら駄目だろう。嫌われるのは俺だけで良いんだ。

「んで…あの、金髪野郎は何してるのかねい…」

「あれ、殴ったよな！？お前殴ったよな！？」

「確かに…暇じゃないのか？あそこにずっといるのは」

「あれ！？無視かな？無視するのかな！？」

金髪野郎がずっと上空に居るんだが…暇じゃないのかな？それとも逃げたと勘違いされたくないからずっといるのかな？それと…なんで俺が先に行かせてくれないのかな？何、俺…あいつのIS潰すと思われてんの？酷いわ…

「お、織斑君織斑君！」

「山田先生、落ち着いて下さい。はい、深呼吸」

「は、はいっ。す〜は〜、す〜は〜」

「そこで、止めてください」

「うっ…」

お前……後ろに鬼神おにがいるのによくやるなあ……

「……ぷはあっ！ま、まだてすかあ？」

「目上の人には敬意を払え、馬鹿者」

……何でだろう、一夏が叩かれた時にターミネーターのBGMが流れた……あ、千冬さんだからか。

「お前もか？」

「い、いえ！……………それで、山田先生。一夏に用があるんですか？」

「あつれええ！？俺無視なの！？ねえ！！」

「あ、そうなんです！織斑君の専用ISが届きました！！」

やっとか……………さて、モルモットを倒してこいよ？

「これがお前のISみたいだぜ？一夏」

「え？ああ、これが……………」

「はい！織斑君の専用IS『白式』です！」

これって……………たしか束さんの研究所の端にあったような  
埃が被つてた奴か。

「すぐに装着しろ。時間がないからフォーマットとフィッティング  
は実戦でやれ」

「あれ…………？」

さて、篝さんは……………いない？どこに行ったんだろうか？

「背中を預けるように……………ああ、そうだ。座る感じがいい。後は  
システムが最適化する。」

「……………」

あれー？篝さん……………探しに行こうかな……………

「織斑先生」

「どうした久遠？」

「俺の負けでいいんで、観客席に行つていいですか？」

「駄目だ。お前を推薦した奴の事を考える」

「……………一夏なんですけど」  
「……………そうだったな……………」

よし、勝った。さてと、行こうか。『待ちなさい！逃げるのですか！』……………何で見えているんだ。

「だってさ……………俺とやっても意味ないって……………弱いもん」

『だからって逃げるのですか！極東の猿はそれほどバカですのね！良く分かりましたわ！』

「……………あ？」

はい、あいつ殺す。絶対に殺す。

「織斑先生、バトルロイヤル形式にしてほしいです……………そうすれば一回で済みますよね？」

「……………そうだな。あいつはお前に任せる」

よし、これで……………良くねえええ！！箒を探しに行けないじゃん！！……………まあ、いい。金髪を叩きのめせばいいんだからな。

「一夏、俺も出る」

「え？……………お前、殺るのか？」

「当たり前だ。ただの金髪にあんな事言われて許せるかよ……………」  
「……………ほどほどにな」

さてと、予定が狂ったけど……………金髪の息の根を止めに行くか。

『おい龍二！キバで行くのか？』

「んー、初めはそれでいい。んじゃ、殺りますか」

『おう！ガブッ！』

「……………変身、でいいのか？展開だよ……………」

俺はまずISを展開させ、キバットに俺の首筋を噛ませる。そしてキバットが腰に付けてあるベルトに装着されると、俺は仮面ライダーキバになるんだが……これは嫌だな。どういう状況かと言うと俺のIS、『オールドライダー』はそもそもが装甲が分厚い。その上にキバの鎧が装着されるから……凄く強そうんだけど、遅そうに見えるんだ。実際速いが。

「さてと、行きますか………」

『キバって行くぜ!!』

「ああ、龍二!」

「夏くんには悪いけど……君の出番無いかもね。」

~~~~~

あれ、結局俺のせいでこうなったのか!! まあいい、全力だ!!

龍二の暴走は止まらない(後書き)

次回、戦闘開始!

感想お待ちしております。

織斑一夏の暴走

「さっさと終わらせたいんだ、抵抗するなよ？」

「あら、それはハンデですかしら？」

「あの一……俺は……」

「フーか、お前がハンデほしいだろ？本当に手加減しないぞ？」

もういいや……成り行き上こうなったけど、どっちも潰せるならいいか。結局こうなる運命だったのか……

「私は代表候補生なのですよ？ハンデなんかいらないですわ！」

『龍二、あいつは射撃する気満々だぞ！』

「だとさ、一夏……行くぜ？」

「了解！」

そういうと俺と一夏は左右に分かれる。そして金髪は俺達がいた場所に《スターライトmk?》の照準を合わせてたらしく、そのまま一発撃つと、一夏に掠ったみたいだ。ま、俺には関係ないわな。

「さあ、踊りなさい。わたくし、セシリア・オルコットとブルー・テイアーズの奏でる円舞曲ワルツで！」

「黙れ……そんなこともできないのか？」

「なっ……！」

金髪の目の前に移動して、とりあえず邪魔な《スターライトmk?》を蹴り飛ばしておく。こうすりゃ相手はあのファンネルもどきしか使えなくなる……はずだ。

「さあて、ここからが本番だな……」

「な、なめた事をしてくれませぬね！」

「そりゃ、早く終わらせたいから…行くぜ？キバット！」

『おう！ガルルセイバー！』

ガルルフォームになった俺は、いきなり形が変わったことに動揺している金髪をガルルセイバーで斬る。慌てて避けようとしたが間に合わなかったようで、直撃つと…あれ、一夏は？

「どうせ俺なんか…ええい、ままよ！」

「じゃーま…つとー！」

「ぐっ！」

近接ブレード構えて突っ込んできました。ガルルセイバーで受け止めて、押し返すけどな。弱い弱い…その程度かよ？

「くっ…行きなさい！《ブルー・ティアーズ》！」

「ようやくきたか…キバット、動きを読んでくれ」

『任せろ！』

ようやく自立稼働の《ブルー・ティアーズ》を出してきやがった。遅いんだよ…全てを潰してやる…

「つたく…行くぜ？早く終わらせたいんだ…」

『そこだ、龍一！』

「おう！」

《ブルー・ティアーズ》は4機あるんだが、そのうち2機を斬り落とす。これぐらいのスピードとパターンじゃすぐ読めるっての…あいつ弱いな。代表候補生って言うからどんなもんだと楽しみにしていたが…興醒めだ、さっさと終わらせよつと。

「速い!? くっ…」

「チエックメイト」

「かかりましたわ! 《ブルー・ティアーズ》は6機ありましてよ!」
「えー、何だつてー」

…ちょっと棒読みだったかな? まあ、いいや…来い、タツロット…!

「龍二!」

「もう終わりでしょうか?」

『テンションフォルティッシモ!』

「ったく…遅いつての、タツロット!」

『すいません』

ミサイルに衝突する前にタツロットを呼び出してエンペラーフォームに変身し、ザンバットソードでミサイルを通り際に斬る。こうすると、爆発したように見えるんだよな。まあ、俺には関係ないが。

「なっ…! また形が変わった!?!」

「これが本来の形だ…終わらせるぜ?」

『ウエイクアップ・ファイバー!』

相手の懐に飛び込み、ザンバットソードで斬り、上空へ飛ばす。金髪が体勢を整える前に、蹴りの体勢に入り、そのまま相手に蹴りをかます。

「おらあ!」

『いい感じだ、龍二!』

「っ! まだ行けますわ!」

「そうかい……だが、終わりだ」

俺は金髪の真横まで飛んでいき、ザンバットソードを相手の首元につきつける。

「チェックメイト……」

「ま、負けですわ……」

「そう、か……よし、ありがとな、戦ってくれて！」

俺は礼儀正しいの！！ちゃんと挨拶くらい出来るわ！！しっかりと抱き抱えて……ってあれ！？いつの間にか抱き抱えている！？

「っ！……男の方でも、こういう方がいらっしやるのですね……」

「ん？どうした？」

「い、いえっ！こちらこそ、ありがとうございます……また、先日の方は申し訳ありませんでした」

ん、いい子！俺はこういう子好きだよ？割と本気で。一夏が鈍感だからな……… 俺は残念だが。

「一夏？っておわっ！！」

「お前らのお陰でフィッシングが終わったよ………ファースト・シフト 一次移行もな

………」

あれ、怒ってらっしやる？ま、待てよ！今は金髪を俺は抱き抱えているの！わかれよ！そりゃ空気だったのは分かるけどよ！

「ったく……オートバジン！オルコットを頼む」

「あ、あの……よろしければ、セシリアと呼んでくださいませ……」

「おう、じゃあセシリア！また後でな！」

「は、はい!」

オートバジン（こいつも神が作ってくれたらしい）にセシリアを任せ、一夏の方を向く。

「すまないな、お前を無視して。だけど、これで本気で戦えるだろうか？」

「ああ、そつだな……………うらああ!」

力任せ、か。こんなもん避ける必要もないな。ザンバットソードで一夏の？雪片式型？を受け止め、相手の腹に蹴りを入れる。

「ぐあつ!」

「つたく……………その程度か？だけど、流石千冬さんが使ってた剣だな。強い……………」

『龍一!』

「うおつと……………何だよ、筭？」

朗報だ。俺が探そうとした筭さんが俺に通信で話しかけてきた。探す暇が省けたっていつか……………

『その、だな……………お前は一夏に勝てるのか？』

「当たり前だろ……………俺は絶対に勝つ。俺のために、そして、お前のためにもな」

『なっ!……………そ、そつか……………絶対に勝つのだぞ!』

「了解つと……………」

「話は終わったか？」

「おう、いくぜ!」

一夏と距離を取り、お互いに瞬間加速をして近づき、すれ違い様に

イケニッション・ブースト

一閃する。だがな、俺の方が一步上手だ。

『試合終了。勝者——久遠 龍二』

「当然の結果だ」

「くそっ！」

すれ違い様、俺はあいつの剣にセルメダル数枚を叩きつけ軌道をずらしたんだ。ずるい？そんなこと知らない！！

「さっつと………帰って寝るか」

織斑一夏の暴走（後書き）

相変わらず戦闘描写……………orz

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2188z/>

IS(インフィニット・ストラトス) ~何というチート人生~

2011年12月14日22時46分発行